



顧問作品解説

ろうか 弄花

写っているものは、バラの花と手だけ。適切なライティングとブレがなければ、まず作品にはならない。平凡な被写体であっても工夫すれば、これくらい美しくなる。ここでの主役は被写体というよりは、光そのものであり、バラや手は脇役に回っている。光は写真の命だが、その光を最大限駆使して、何を表現するかがカギ。その「何を」が今ひとつ見えてこないところが今後の課題だが、「何を」が撮る前に見えている人はよほどの達人。普通は、「何を」を時間をかけて撮りながら見つけるのである。